

読書通信



No. 196

① 石橋湛山を主題にした本はあまたあるが、昭和史の泰斗が10年以上前から構想を温めてきた本格的な湛山論がようやく上梓された。保阪正康『石橋湛山の65日』（東洋経済新報社、1980円）は期待を裏切らぬ力作である。書名のとおり石橋内閣の誕生までと、病を得てわずか2カ月で歴史的な潔さで退陣するまでとを2本の柱に据えて、湛山が何を国民に訴えたか、何をしようとしたかを過不足なく描いている。

著者は「最短の在任、最大の業績」と評しているが、湛山ほどの哲学と政策を矛盾なく両

立させえた政治家は、日本の政治史に他に例を見ないと言つて過言ではなからう。吉田茂との抗争、GHQとの対峙、自主平和路線、国民への真摯な誓いなど、政治家湛山の魅力には改めて感服せざるをえない。戦前からの小日本主義、実用主義、倫理主義を政治家としておれずに貫き通す湛山像として描き抜いたところは、人物論としても一級品といえる。昨今の政治の貧困に対する頂門の一針として読者は爽快な読後感を持つだろう。湛山に興味はあっても湛山本はまだという人にこの際、ぜひお薦めしたい。

② 今の株高は金余り下のバブルと呼ぶしかないだろう。機関投資家も企業も個人もゼロ金利下ではほかに運用対象がないのも事実だ。そんな中、前田昌孝『株式市場の本当の話』（日経

プレミアシリーズ、935円）は目からウロコの指摘が詰まっている。「課題山積の投資信託」「公的年金の危うい運用」「長期投資は本当に有効か」「ESG投資の死角」など、市場に興味をもつ人にとっては面白い難問が次々登場する。

株式市場を永年ウオッチしてきたベテラン記者ならではの視点と分析はとても参考になる。しかも歯に衣着せずというか、金融庁、取引所、日銀、GPIF、投信など市場関係者に耳の痛い話が多々聞けるのも好ましい。年金基金に関係している筆者としては日頃、疑問に感じている諸点をめぐりわが意を得たりの感をもった。

③ 書名につられ伊藤亜紗編『利他』とは何か』（集英社新書、924円）を買い求めた。中島岳志、若松英輔、國分功一郎、磯崎憲一郎とい

う筆者の顔ぶれも理由だったが、率直にいう隔靴搔痒の感も残った。術学的といつては失礼だが、もう少し素直かつ平明だったらよかつたと思う。とはいえ利他を考えるにお手軽ではない。じっくり考えるには大いに参考になる。

④ 千足伸行『画家たちのパートナー』（論創社、2640円）は刺激的で面白かつた。パートナーつまり連れ合いでは、冷えた仲や同棲も含め愛憎が彼らの作品にどう影響したのかが、マネ、モネ、ルノアール、セザンヌなど有名無名15人の画家たちの人生とともに描かれる。多く絵のモデルとしても登場する彼女たちは画家に劣らずみな個性的だ。本書のおかげで名画を見る目が違ってきそうな気がしてきた。名作の裏にこんなドラマがあったとは。（浅野 純次）